

日本における人種的マイクロアグレッション受容性尺度の予備的検討

—確認的因子分析による検討と米国データとの比較¹⁾—Preliminary Examination of the Acceptability of Racial Microaggression Scale in Japan:
Confirmatory Factor Analysis and Comparison with U.S. Data

野田航一NODA Wataru

初等教育部門

本研究では、日本における人種的マイクロアグレッションについて、人種的マイクロアグレッション受容性尺度 (Mekawi & Todd, 2018) を用いて検討した。日本の大学生・大学院生 52 名のデータを用いた確認的因子分析と、米国学生データ (Mekawi & Todd, 2018) との比較を行った。その結果、いくつか因子負荷量が低かった項目を削除する必要があったものの、原版と同様の因子構造を持っていることが明らかとなり、おおむね良好な信頼性係数も得られた。米国学生データとの比較からは、日本の学生の方が人種的マイクロアグレッションを受容しやすい可能性が示された。

キーワード：人種的マイクロアグレッション、人種的マイクロアグレッション受容性尺度、大学生

I. 問題と目的

近年、「多様性」や「ダイバーシティ」という言葉が様々なところで飛び交うようになっており、多様性を尊重し、推進することが積極的に奨励されている。例えば、「障害」を包摂するためのインクルーシブ教育システムの構築や「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」の施行、国籍等の文化的差異を包摂するための多文化共生推進プラン、ジェンダー格差解消を目指した男女共同参画社会基本法の制定、性的マイノリティの存在を広めることを目指した「東京レインボープライド」のようなイベントなど、様々なマイノリティを包摂する社会を構築するための取り組みが行われてきている。

しかし、このような様々な取り組みが進められているにも関わらず、現状では様々な差異を平等に包含する社会の実現には程遠く（岩渕, 2021）[1]、マイノリティの経験する格差や差別の問題は未だ変わらずに継続している。「多様性」や「ダイバーシティ」という一見ポジティブで心地よい言葉を用いた取り組みは、それ自身不可欠であることは疑いがないものの、それだけでは現に存在している格差や差別の問題をぼやかし、先送りにしてしまう可能性も指摘されている（Folarin, 2020）[2]。格差や差別の問題を解消していくためには、差別や偏見の問題に直接的にアプローチしていくことが必要である。

解消すべき格差や差別の問題のうちの一つが、国籍や人種に基づく問題である。2009 年には、京都朝鮮学校襲撃事件が発生し、在日特権を許さない市民の会のメンバーらが京都朝鮮第一初級学校校門外でヘイトスピーチを行い、当時在学していた多数の在日コリアンの児童らが差別被害を受けている。また、2018 年には在日本朝鮮人総聯合会中央本部銃撃事件というヘイトクライムが起きている。さらに、新型コロナウイルスと関連した人種差別も生じており、2020 年 1 月には箱根の駄菓子店において「中国人入店禁止」の張り紙が貼られたことはメディアでも報道された。2020 年 3 月には、新型コロナウイルス感染拡大への対策として、さいたま市が市内の幼稚園・保育園などに市の備蓄用マスクの配布を始めたが、その対象から埼玉朝鮮初級中級学校幼稚園が除外された。市の職員は同学校側に「転売の恐れがある」との趣旨の発言をしており（しんぶん赤旗, 2020）[3]、ここからは明確な差別意識が伺える。

これらの比較的分かりやすい差別行為は当然解決すべき重要な課題ではあるが、「本邦外出身者に対する不

当な差別的言動の解消に向けた取組の推進に関する法律（ヘイトスピーチ解消法）」が2016年に施行されたことや、様々なマイノリティに対するメディアを含めた啓発活動の成果もあつてか、あからさまな差別行為については減少している、あるいはほとんどないと考えている人も少なくないと思われる。しかし、現代社会において差別行為がなくなったわけでは決してなく、より日常的な文化や制度、個々人の心の中に潜む表面的には分かりづらい差別行為は継続して行われていることが指摘されている。このような日常生活にありふれた言葉や行動、文化や制度に潜む無意識の差別は、マイクロアグレッション（microaggression）と呼ばれ（Sue, 2010）[4]、主に海外を中心に研究が行われている。

マイクロアグレッションは、人種に限らずジェンダー、性的指向、階級、障害の有無に基づくこともあるが（Sue & Capodilupo, 2008）[5]、本研究では人種的マイクロアグレッション（racial microaggression）に焦点を当てる。人種的マイクロアグレッションとは、日々のありふれた言葉、行動、または環境の面での侮辱的な行為で、意図的かどうかにかかわらず、有色人種に向けて彼ら・彼女らを軽視し侮辱するような敵対的、中傷的、否定的なメッセージを送る（Sue et al., 2007）[6]。人種的マイクロアグレッションの例としては、アメリカにおいてアジア系アメリカ人が白人のアメリカ人に「どこから来たの?」と言われる（「あなたはアメリカ人ではない」というメッセージ）、「英語うまいね」と言われる（「あなたはよそ者である」というメッセージ）、黒人が白人に「あなたは、あなたの人種（黒人）にとっての誇りですね」と言われる（「有色人種は一般的に白人ほど知的ではない」というメッセージ）、黒人が白人に「私はあなたの肌の色なんて見てない」と言われる（肌の色にまつわるネガティブな経験を否定するメッセージ）、などが挙げられる。同じようなことは、日本においても見られることが指摘されており、例えば、日本人ではないように見える人に対して「日本語が上手ですね」と言う、日本人ではないように見える人を見つけると財布を強く握りしめる、誇張された鼻や過剰な肌の色をした外国人の風刺画、などが挙げられる（e.g., Ardou, 2012）[7]。

Sue et al. (2007) は、マイクロアグレッションには3つの形態があるとしており、それぞれマイクロアサルト（microassault）、マイクロインサルト（microinsult）、マイクロインバリデーション（microinvalidation）である[6]。マイクロアサルトとは、名前の呼び方や忌避的な行動、または意図的な差別行為を通じて、目標とする被害者を傷つけることを意図した主に言語的または非言語的攻撃によって特徴づけられる、露骨な人種的侮辱のこととされる。誰かを「有色人種（colored）」や「東洋人（Oriental）」と呼ぶこと、人種的蔑称を使うこと、異人種間の交流を妨げること、有色人種よりも白人客に意図的にサービスを提供すること等がその例である。マイクロインサルトは、無礼さや無神経さを伝え、その人の人種的伝統やアイデンティティを貶めるコミュニケーションのことを指す。マイクロインサルトは、微妙な侮辱のようなもので表現され、しばしば加害者の自覚は伴わないが、明らかに有色人種の相手に隠れた侮辱的なメッセージを伝えている。例としては、白人の雇用主が有色人種の採用候補者に「人種に関係なく、最も有能な人が仕事を得るべきだと考えています」と言うこと、タクシーが黒人を素通りして白人の前に止まること、店員が小切手を現金と引き換える時に黒人に対して白人よりも多くの身分証明書を要求すること等が挙げられる。マイクロインバリデーションは、有色人種の心の動き、感情、経験的リアリティを無視し、否定し、無価値化するコミュニケーションのことである。マイクロインバリデーションは、3種類のマイクロアグレッションの中で最も加害者のダメージが大きくなる可能性があり、それは人種に関わるリアリティを直接的かつ陰険に否定するからだと言われている（Sue, 2010）[4]。マイクロインバリデーションの例としては、アメリカで生まれ育ったアジア系アメリカ人が英語を上手に話すことを褒められること、白人が有色人種に対して「あなたの人種など見てない」「私たちはみんな同じ人間だ」と言うこと、個人の種差別の否定（「異人種間の結婚には全く反対しない、ただ子どもたちのことが心配なだけだ」）、等が挙げられる。これら3つの形態は、加害者の自覚の程度や、意図的か否かという面においては多様であるものの、すべて受け手に対して攻撃的なメッセージを伝えるものである。

Sue et al. (2007) は、人種的マイクロアグレッションが発生した時、加害者と被害者の双方に心理的ジレンマが生じるとしており、その中でも特に注目に値するものとして以下の4つのジレンマを挙げている[6]。1つ目は「人種的リアリティの衝突」であり、先行研究では有色人種と白人の人種感覚はかなり異なっていることが示されている（Jones, 1997）[8]。たとえば、多くの白人は自分自身を人種差別主義者であるとか、人種差別的な行動をとるとは思っていない。一方、黒人の側は、白人は人種に無頓着であり、自分達が優れていると信じ、人種を理由に黒人を粗末に扱っていると認識している（Solórzano et al., 2000）[9]。2つ目は、「意図的ではない

バイアスの不可視性」で、加害者自身にとっては人種的バイアスはないと信じた無意識の行動のため、人種的バイアスによる行為があったかどうか不確定になる。3 つ目は「人種的マイクロアグレッションの被害の過小評価」であり、加害者はたいていの場合、被害者が過剰に反応し、過度に敏感になっていると考える。最後の 4 つ目は、「マイクロアグレッションへの反応としての金縛り状態 (Catch-22)」である。マイクロアグレッションになり得ることが起こると、被害者は「自分に起きたと思っている出来事は、本当に起きたのか？これは意図的な行動だろうか、それとも悪気なくしてしまった侮辱だろうか？自分はどうか応えるべきだろうか？モヤモヤしたまま座っているべきか、対決すべきか？この話題を持ち出すとして、どうやってそれを証明する？努力する甲斐のあることだろうか？何事もなかったことにすべきだろうか？」など、様々な葛藤が生じ困難な状況に立たされた結果、心理的なストレスや苦痛を感じて金縛りのような状態になってしまう (Sue et al., 2007) [6]。

Goodman (2011) は、マイクロアグレッションの加害者になりうる、人種、ジェンダー、性的指向、宗教等においてマジョリティに属する人々は、個人のアイデンティティが社会的に構築されたカテゴリー分けによって優位性をもつ「特権集団」に属しているとしている[10]。文化や社会における規範は、主にこの特権集団の特徴を土台にして成り立っており (Wildman, 1996) [11]、それが基準となって他の集団を判断するという文化規範が制度化され、政策や社会的習慣として確立されていくため、特権集団が「正常」とであるとみなされている。さらに、特権集団は優位性を持ち、文化的・制度的な権力によって支配し社会的な不均衡を生み出してそれを維持し、一般的に普及している考え方や現実の捉え方を規定し、それを「普通」として捉えている。つまり、特権集団の基準が社会の基準となっているため、特権集団に属する人々は、自分たちが優位なアイデンティティを持ち、それによって特権を得ていること、自分たちの優位アイデンティティを維持していることに対して、ほとんど無自覚である。

マイクロアグレッションは、日常の会話や行動に現れる偏見や先入観に基づいた否定的なコミュニケーションのことであるが、意識的に進んでそのような悪質な行為を行う人は多くはない。特権集団は、文化や社会に潜む特権集団の正常性や優位性、権力の維持に対して自分自身の特権を意識することが少ない (意識する必要がない) ために、マイノリティが受けている不公平な扱いや、自分や他人の行動が偏見に基づいていることにほとんど気が付かない。それ故、自分は偏見を持っておらず故意に差別などしないと信じている人であっても、無意識のうちにマイクロアグレッションを行っている可能性がある。

上述のように、マイクロアグレッションという行為は、加害者側が無意識に行っていることが多く、それを減少させるためには、まずマイクロアグレッションに気づき、それは許容できないものであると認識していく必要がある。そのような認識の中で、Mekawi & Todd (2018) は、白人が人種的・民族的マイノリティに対する人種的マイクロアグレッションをどの程度受容できるか (人種的マイクロアグレッション受容性) を測定する尺度 (the Acceptability of Racial Microaggression Scale: ARMS) の開発を行っている[12]。イリノイ大学の大学生を対象とした調査の結果、ARMS の因子構造が明らかになり、ARMS の再検査信頼性と構成概念妥当性を確認している。さらに、人種的マイクロアグレッション受容性が高いほどその人自身がそのマイクロアグレッションを行う可能性が高いこと、他者が人種的マイクロアグレッションに該当するような発言をした際に公然と反対する可能性が高いことが明らかにされている。

このように米国ではマイクロアグレッションのような日常生活の中に溶け込んだ無意識の差別行為についての研究が進められているが、これまでのところ日本におけるマイクロアグレッションの研究は少ない。本研究では、日本においてマイクロアグレッションを検討していくために、人種的マイクロアグレッション受容性に焦点を当て、Mekawi & Todd (2018) が開発した ARMS[12]を日本の大学生・大学院生を対象に実施し、米国学生のデータ (Mekawi & Todd, 2018) [12]との比較を行った。

II. 方法

1. 調査実施期間および状況

本研究の調査は、2022 年 11 月から 12 月にかけ、Google Forms を用いて行われた。調査対象者は任意のタイミングで調査に回答した。

2. 調査対象者および倫理的配慮

本研究の調査対象者は、教員養成系大学に在学する大学生および大学院生 52 名（大学生 34 名、大学院生 18 名）であった。平均年齢は 25.8 歳(範囲：19-59)であった。未回答項目などのデータの欠損は見られなかったため、52 名全員のデータを用いて分析を行った。

調査は、個人ではなくグループの SNS や複数名宛のメールを通して著者の所属する大学の大学生および大学院生に周知された。調査にあたり、Google Forms の冒頭に、本研究の目的、個人情報および調査結果の取り扱い方法、研究参加の任意性（参加に同意しない場合にも不利益がないこと）、Google Forms への回答をもって研究参加に同意したものとすること、を示した上で調査に回答させた。回答は無記名であり、SNS やメールで協力依頼を受けた学生が回答を強制される方法ではなかった。

3. 調査で用いた尺度

本研究では、Mekawi & Todd (2018) が開発した ARMS[12]を用いて、人種的マイクロアグレッション受容性を測定した。ARMS は、「多様な人種を含む仲間たちと、さまざまな話題について話している様子を想像してください。その話題には人種や民族性に関するものも含まれています。白人のメンバーが、人種的・民族的にマイノリティであるメンバーに対して、以下のような発言をした場合、あなたはどの程度受け入れることができますか」という教示のもと、各項目に対して、全く受け入れられない (=1) から完全に受け入れられる (=6) までの 6 段階で評定を行う尺度であった。つまり、得点が高いほど人種的マイクロアグレッションを受容していると解釈できる。ARMS は全部で 34 項目 4 因子の尺度であり、それぞれ「人種間差否定」8 項目 (Color Evasion: $\alpha = .94$)、「権力構造否定」9 項目 (Power Evasion: $\alpha = .94$)、「被害者非難」9 項目 (Victim Blaming: $\alpha = .93$)、「異国情緒化」8 項目 (Exoticizing: $\alpha = .91$) であった。各項目は Google Forms の機能で調査対象者毎にランダムな順序で提示された。

4. 分析方法

本研究における統計分析は HAD (清水, 2016) [13]の version 18 を用いて行った。まず、ARMS の 4 因子についての確認的因子分析を行い、因子構造と信頼性係数を検討した。その後、因子毎に尺度得点 (平均得点) を算出し、米国学生のデータ (Mekawi & Todd (2018) の研究 3) の平均値[12]との 1 標本の差の検定を行い比較した。また、項目毎の平均得点についても米国学生のデータ (Mekawi & Todd (2018) の研究 2) の平均値[12]との 1 標本の差の検定を行い比較した。

III. 結果

1. ARMS の確認的因子分析

Mekawi & Todd (2018) [12]に基づき、34 項目 4 因子構造の確認的因子分析 (最尤法、プロマックス回転) を行った。その結果、人種間差否定の 1 項目、権力構造否定の 1 項目、被害者非難の 3 項目、については因子負荷量が .40 以下であったため削除した。その上で改めて 4 因子構造の確認的因子分析を行ったところ、因子負荷量が .40 以下のものがなかったため、因子分析を終了した。最終的に、人種間差否定 7 項目、権力構造否定 8 項目、被害者非難 6 項目、異国情緒化 8 項目の合計 29 項目となった。各尺度得点の信頼性係数は、人種間差否定が $\omega = .86$ 、権力構造否定が $\omega = .89$ 、被害者非難が $\omega = .73$ 、異国情緒化が $\omega = .77$ であり、おおむね良好な内的一貫性が確認された。回転後の因子負荷量と信頼性係数 (ω 係数) および項目毎の平均値と標準偏差を表 1 に、各尺度得点 (平均得点) の記述統計量を表 2 に示した。

2. 尺度得点の米国学生データとの比較

本研究で得られた各尺度得点について、Mekawi & Todd (2018) の米国学生データ[12]との比較を行った。比較においては、Mekawi & Todd (2018) の研究 3 で示されている平均値[12]と 1 標本の差の検定を行った。なお、本研究の尺度得点を構成する項目数と Mekawi & Todd (2018) [12]の尺度得点を構成する項目数に違いがあるため、比較においては Mekawi & Todd (2018) [12]で使用されていた 34 項目全てを用いて本研究の尺度得点を算

表 1 人種的マイクロアグレッション受容性尺度の確認的因子分析の結果と項目毎の平均値および標準偏差

項目	C1	C2	本研究 (<i>n</i> = 52)		Mekawi & Todd (2018) (<i>n</i> = 497)		<i>df</i>	<i>t</i> 値	<i>p</i> 値
			<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>			
人種間差否定 ($\omega = .86$)									
私はあなたの人種など見ていない、一人の人として見ているんだ。	.53	.51	4.96	1.19	4.37	1.53	51	3.59	.001
私は、あなたの肌の色が黒色でも茶色でも紫色でも黄色でも緑色でも関係ない。私はすべての人を同じように見ている。	.77	.78	4.13	1.63	4.35	1.56	51	-0.95	.346
たったひとつの人種だけがある、それは人類という人種だ。	.40	/	4.19	1.46	4.19	1.60	51	0.01	.991
人々はもう人種を見るべきではない。	.71	.70	4.12	1.64	3.65	1.61	51	2.05	.046
見た目が違っても、基本的には同じなんだ。	.74	.75	4.52	1.48	4.01	1.50	51	2.49	.016
私は人種にこだわらない。	.65	.66	4.58	1.32	3.73	1.52	51	4.63	.000
私たちはみんな同じだ。	.60	.60	3.69	1.62	4.14	1.58	51	-2.00	.051
人は人、人種なんて関係ない。	.68	.67	4.77	1.17	4.02	1.65	51	4.64	.000
権力構造否定 ($\omega = .89$)									
法制度では、誰もが同じように扱われる。	.73	.72	4.44	1.55	2.9	1.50	51	7.17	.000
人種に関係なく、誰もが同じように成功するチャンスがある。	.77	.77	4.63	1.55	3.37	1.59	51	5.89	.000
人種に関係なく、誰もが公平な法的裁判を受けることができる。	.79	.79	4.60	1.49	2.86	1.44	51	8.43	.000
学校や病院など、誰もが同じ資源を利用することができる。	.67	.67	4.56	1.46	3.19	1.54	51	6.75	.000
誰が警察に引き止められるかに、人種は関係ない。	.70	.70	4.60	1.51	3.09	1.48	51	7.19	.000
誰が刑務所に送られるかに人種は関係ない。	.82	.82	4.75	1.43	3.19	1.51	51	7.89	.000
人種や民族に関係なく誰もが同じように教育の機会を得ることができる。	.67	.66	4.54	1.55	3.21	1.54	51	6.17	.000
警察に撃たれるのは、その人の人種よりもその人が何をしていたかが問題なんだ。	.48	.48	4.37	1.63	3.55	1.54	51	3.60	.001
人種に関係なく、人生においては誰もが同じような困難を経験するものだ。	.29	/	3.58	1.53	2.89	1.54	51	3.25	.002
被害者非難 ($\omega = .73$)									
たくさんの人々が貧困から抜け出すために働いてきたのに、なぜ黒人やラテンアメリカ系の人とは同じようにできないの？	.66	.69	2.12	1.35	1.83	1.07	51	1.52	.134
アフリカ系アメリカ人は、もっときちんとした服装をすれば、もっと仕事をもらえるはずだ。	.36	/	1.96	1.10	1.82	0.97	51	0.93	.359
アフリカ系アメリカ人は、スラング（俗語）をあまり話さなければ、もっと仕事をすることができる。	.52	.49	2.40	1.26	1.94	1.11	51	2.66	.010
人種的マイノリティが政府からの援助をあてにするのをやめない限り、人種問題の発展はないだろう。	.41	.44	2.52	1.20	1.98	1.20	51	3.25	.002
黒人は奴隷制度を自分たちの問題の言い訳にするのをやめるべきだ。	.48	.53	1.83	0.92	1.91	1.30	51	-0.65	.519
マイノリティは人種差別に敏感すぎるだけだ。	.49	.52	2.04	1.08	1.95	1.10	51	0.59	.559
ラテンアメリカ系の人、マイノリティであるというだけで、多くの不当な利益を得ている。	.39	/	3.23	1.63	2.05	1.14	51	5.23	.000
あなたと同じ人種の人を採用されやすいのは、企業が人種的な定員数を満たす必要があるからだ。	.66	.65	2.19	1.14	1.95	1.09	51	1.54	.131
ラテンアメリカ系の人の方がもっと英語を話すことができれば、もっと仕事に就けるようになるはずだ。	.12	/	2.50	1.18	2.09	1.16	51	2.51	.015
異国情緒化 ($\omega = .77$)									
ラテンアメリカ系の人、とにかく色っぽい。	.65	.65	2.62	1.44	3.38	1.45	51	-3.82	.000
ネイティブ・アメリカンはとても気性が荒い。	.67	.66	2.02	1.06	2.4	1.12	51	-2.60	.012
私はただ黒人女性のお尻が好きなんだ。	.54	.54	2.38	1.39	2.43	1.29	51	-0.24	.815
ラテンアメリカ系の男性は、とても情熱的な人たちだ。	.47	.47	3.60	1.36	2.94	1.34	51	3.48	.001
あなたはとてもエキゾチック（異国風）だ。	.54	.53	3.31	1.55	3.11	1.44	51	0.92	.363
芸者さんみたいで綺麗だね。	.55	.56	3.40	1.50	2.67	1.34	51	3.53	.001
ボカホンタスみたいな美しさだね。	.54	.56	3.27	1.52	3.21	1.49	51	0.28	.780
肌の色が異国情緒を醸し出しているね。	.44	.44	2.42	1.45	2.55	1.25	51	-0.63	.530
因子間相関									
人種間差否定	.38		権力構造否定		被害者非難		異国情緒化		
権力構造否定			.03		.08				
被害者非難					.16		.71		
異国情緒化									

出して使用した（表 3）。結果、人種間差否定、権力構造否定、被害者非難の 3 つにおいて、本研究の尺度得点の方が米国学生データよりも有意に高く、人種的マイクロアグレッションを受容しやすいことが明らかとなった。

3. 項目毎の米国学生データとの比較

本研究で得られた項目毎の平均得点について、Mekawi & Todd（2018）の米国学生のデータの平均値[12]との比較を行った。比較においては、Mekawi & Todd（2018）の研究 2 で示されている項目毎の平均値[12]と 1 標本の差の検定を行った（表 1）。

人種間差否定を構成する 9 項目のうち 5 項目、権力構造否定を構成する 9 項目全ての項目、被害者非難を構成する項目 9 項目のうち 4 項目、異国情緒化を構成する 8 項目のうち 2 項目について、本研究のデータの方が米国学生データよりも有意に平均値が高かった。また、異国情緒化の 2 項目については、本研究のデータの方が米国学生データよりも有意に平均値が低かった。全体としては、有意な差が確認されたのは 34 項目中 20 項目（約 59%）であった。

表 2 各尺度得点（平均得点）の記述統計量

	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>Min</i>	<i>Max</i>
人種間差否定	52	4.30	1.12	2.17	6.00
権力構造否定	52	4.56	1.13	1.50	6.00
被害者非難	52	2.18	0.75	1.00	3.83
異国情緒化	52	2.88	0.88	1.13	4.63

表 3 各尺度得点（平均得点）の比較

	本研究 (<i>n</i> = 52)	Mekawi & Todd (2018) (<i>n</i> = 404)			
	<i>M</i>	<i>M</i>	<i>df</i>	<i>t</i> 値	<i>p</i> 値
人種間差否定	4.37	4.06	51	2.25	.03
権力構造否定	4.45	3.14	51	8.85	.00
被害者非難	2.31	1.95	51	4.00	.00
異国情緒化	2.88	2.84	51	0.31	.76

Note. 各尺度得点は、Mekawi & Todd（2018）と同様の 34 項目全てを用いて算出されている。

IV. 考察

1. ARMS の因子構造

ARMS のデータに対する確認的因子分析の結果、5 項目については因子負荷量が低かったため削除されたが、おおむね原版の尺度 (Mekawi & Todd, 2018) [12]と同様の因子構造を持っていることが明らかとなった。各尺度得点の信頼性係数もおおむね良好であり、ARMS の日本における利用可能性が示唆された。

各尺度得点の平均値の傾向について、Mekawi & Todd (2018) の米国学生データ[12]と対応して検討してみると、Mekawi & Todd (2018) [12]では、被害者非難の平均値が最も低く、次いで異国情緒化、権力構造否定、最も平均値が高い (受容しやすい) のが人種間差否定であった。これについて Mekawi & Todd (2018) は、被害者非難の項目は差別的あるいは批判的な意味合いがはっきりとした表現 (explicitness) であり、そのことが最も受容しにくいことを説明するかもしれないと述べている[12]。また、人種間差否定と権力構造否定は、偏見や差別的なメッセージが背景に含まれているものの、より覆い隠された (masked)、潜在的に不透明な (potentially insidious) 方法で表現されているために受容しやすいと評価される可能性について述べている[12]。本研究のデータにおいても、尺度得点の平均値の傾向は米国学生データと類似した傾向であり、Mekawi & Todd (2018) [12]の指摘と同様のことが当てはまると考えられるが、権力構造否定の平均値が最も高い (あるいは人種間差否定とほとんど変わらないほど高い) ことは、日本における特徴の一つと言えるかもしれない。しかし、この点については本研究のデータのみでは解釈が難しく、今後の検討が必要である。

因子負荷量が低かった項目は「たったひとつの人種だけがある、それは人類という人種だ。(人種間差否定)」 「人種に関係なく、人生においては誰もが同じような困難を経験するものだ。(権力構造否定)」 「アフリカ系アメリカ人は、もっときちんとした服装をすれば、もっと仕事を得られるはずだ。(被害者非難)」 「ラテンアメリカ系の人、マイノリティであるというだけで、多くの不当な利益を得ている。(被害者非難)」 「ラテンアメリカ系の人の方がもっと英語を話すことができれば、もっと仕事に就けるようになるはずだ。(被害者非難)」 の5項目であった。この理由については明らかではないが、特に被害者非難の項目に含まれている「アフリカ系アメリカ人」や「ラテンアメリカ系の人」などという表現が日本の学生にはイメージがつきにくかった可能性なども考えられる。しかし、「ラテンアメリカ系」という語が含まれている項目であっても因子負荷量が高いものもあるため、この点は今後さらに詳細に検討が必要である。

2. ARMS の尺度得点および項目毎の得点の米国学生データとの比較

本研究における ARMS の各尺度得点 (平均得点) を米国学生データ (Mekawi & Todd, 2018) [12]と比較したところ、4 つの尺度得点のうち3 つで本研究 (日本の学生) の方が有意に高いことが示された。また、項目毎の比較においても、全項目の半数程度において本研究 (日本の学生) の方が有意に高いことが示された。以上より、人種的マイクロアグレッションの受容性には日米差があり、日本の学生の方が人種的マイクロアグレッションを受容しやすいことが示唆された。

因子毎に見てみると、人種間差否定においては、本研究の尺度得点が米国学生データよりも有意に高く、項目毎の比較においては、8 項目中5 項目において本研究のデータの方が有意に高かった。人種間差否定は、「私はあなたの人種など見ていない、一人の人として見ているんだ。」「見た目が違っても、基本的には同じなんだ。」

「人は人、人種なんて関係ない」など、人種間の差異を無視して同一性を強調する特徴がある項目によって構成されている因子である。近年の日本には多様な国籍や人種の人々が増えてきているとは言え、総人口に占める外国人人口の割合は2.2%にとどまっており (総務省, 2021) [14]、米国と比較すると圧倒的に「人種」を体感する機会はまだまだ少ないと考えられる。また、苫野 (2022) によると、日本の学校システムは「みんなで同じことを、同じペースで、同じようなやり方で、同質性の高い学年学級制の中で、出来合いの問いと答えを勉強する」システムであり、そのようなシステムの中で「多様性理解」を行う際には、差異よりも共通点に着目した学習過程になり、その結果、「違いはない」「みんな同じである」という考え方に至る場合が多いことが推測される[15]。この「差異よりも共通点を強調する」という考え方が強いことが、人種間差否定の高さと関連している可能性が考えられる。

権力構造否定においても、本研究の尺度得点が米国学生データよりも有意に高く、項目毎の比較においては、

9項目全てにおいて本研究のデータの方が有意に高かった。権力構造否定は、「人種に関係なく、誰もが同じように成功するチャンスがある。」「人種や民族に関係なく誰もが同じように教育の機会を得ることができる。」

「誰が刑務所に送られるかに人種は関係ない。」など、制度的な人種差別や人種差別的な権力構造の存在を否定する項目で構成されている因子である。この因子の項目は全て、文面的には望ましい状態を表した内容ではあるが、これらの項目に高い評価をするということは、現実にある人種差別を否定しているか、あるいは人種差別そのものに気づいていないということが考えられる。日本においては、米国と比較して「人種」を体感する機会が少ないこともあり、人種間で様々な格差（差別）があるという知識（認識）自体が不足していることが考えられる。そのため、文面的には望ましい内容を白人がマイノリティに対して発言した時に、そのことの加害性（実際にある格差や差別の否定）を理解することが特に難しいのかもしれない。

被害者非難においても、本研究の尺度得点が米国学生データよりも有意に高く、項目毎の比較においては、9項目中4項目において本研究のデータの方が有意に高かった。被害者非難は、「たくさんの人々が貧困から抜け出すために働いてきたのに、なぜ黒人やラテンアメリカ系の人は同じようにできないの?」「アフリカ系アメリカ人は、もっときちんとした服装をすれば、もっと仕事を得られるはずだ。」など、人種格差や民族格差の原因を人種的・民族的マイノリティの文化や行動に求める特徴がある項目で構成されている因子である。有意差が見られた項目は「アフリカ系アメリカ人は、スラング（俗語）をあまり話さなければ、もっと仕事をすることができる。」「人種的マイノリティが政府からの援助をあてにするのをやめない限り、人種問題の発展はないだろう。」「ラテンアメリカ系の人は、マイノリティであるというだけで、多くの不当な利益を得ている。」「ラテンアメリカ系の人がもっと英語を話すことができれば、もっと仕事に就けるようになるはずだ。」であった。この結果が得られた理由を明確にすることは難しいが、前述のように人種間で様々な格差（差別）があるという知識（認識）が不足していることが影響しているのかもしれない。人種間格差や差別についての知識がないと、これらの発言の真偽について判断がしづらく、一定妥当性がある発言であると認識し、受容しやすくなる可能性があるのかもしれない。

異国情緒化については、本研究の尺度得点は米国学生データと有意な差はなかった。項目毎の比較については、「ラテンアメリカ系の男性は、とても情熱的な人たちだ。」「芸者さんみたいで綺麗だね。」の2項目においては本研究のデータの方が有意に高かったが、「ラテンアメリカ系の人は、とにかく色っぽい。」「ネイティブ・アメリカンはとても気性が荒い。」の2項目においては本研究のデータの方が有意に低かった。異国情緒化は、人種的・民族的マイノリティの個人と文化を性的モノ扱いする（objectify）、美化する（glamorize）、理想化する（romanticize）などの特徴がある項目で構成される因子である。本研究のデータの方が有意に高かった項目については、文面上だけからはポジティブな内容に受け取ることも可能な発言であるが、この発言に人種の観点に関わることの加害性が分かりにくく、受け入れやすいと評価されたのかもしれない。一方で、本研究のデータの方が有意に低かった項目は、性的なモノ扱いや、気性が荒いなどのネガティブな評価を伴う項目であり、日本人はこのようなネガティブな評価の発言については、誰が誰に対して発言したのかという文脈に関わらず受け入れ難いと判断しやすいのかもしれない。

3. 本研究の課題と今後の展望

本研究は、単一の教員養成系大学に在学する大学生および大学院生52名を対象としたものであり、調査対象者の数は十分とは言えない。確認的因子分析の結果得られた信頼性係数は概ね良好ではあったものの、先行研究（Mekawi & Todd, 2018）[12]ほど高くはない。また、米国学生データとの比較から、日本の学生は人種的マイクロアグレッションを受け入れやすい可能性が示唆された。これらの新たな知見が一般化可能なものかを検討するために、新たにさらに多くのサンプルを対象として検証する必要がある。

本研究では、ARMSのデータのみを収集して分析していたため、妥当性について検証できておらず、再検査信頼性についても検討できていない点は課題である。また、本研究の結果についての考察も、現段階で実証的なデータによる根拠があるとは言いきれない。Mekawi & Todd (2018) では、再検査信頼性も確認され、様々な尺度との関連から構成概念妥当性も検証されている[12]。本研究は、これまで日本において検討されていなかった人種的マイクロアグレッション受容性を測定した初めてのものであり、今後、信頼性・妥当性の検証や、様々な他の変数との関連、実際のマイクロアグレッションの実行との関連、人種や民族等の多様な属性による

人種的マイクロアグレッション受容性の差異の検討などが望まれる。

特に本研究で使用した ARMS という尺度を日本で実施すること自体についての検討は重要である。本研究では米国で開発された ARMS という尺度をそのまま日本の学生を対象に実施したが、ARMS は「白人がその他の人種の人に対して行う人種的マイクロアグレッション」についての受容性を尋ねるものである。そのため、白人の割合が多い米国学生にとって ARMS の項目に回答することは、「自分自身の発言」について評定することになりやすいが、日本の学生の場合は「自分ではない（他の人種の）人の発言」について評定することになる可能性が高い。つまり、本研究で得られたデータは「他者が行う人種的マイクロアグレッション」についての受容性を測定していることとなるため、Mekawi & Todd (2018) の米国学生の結果[12]とは一部異なる点がある点を考慮して結果を慎重に解釈することが必要である。この点については、「日本人がその他の人種の人に対して行う人種的マイクロアグレッション」の事例を収集した上で項目を構成し、新たな日本版 ARMS を開発していくことも今後求められるであろう。その上で、日本版 ARMS の信頼性・妥当性が確認され、他の変数との関連などが明らかになっていけば、ARMS を従属変数としたマイクロアグレッション低減のための教育実践の開発・効果検証などにも取り組んでいくことができるだろう。現代社会で課題となっている表面上分かりづらい差別行為を予防していくためにも、本研究のようにマイクロアグレッションという現象の様々な側面を測定する方法の開発が求められる。

注

1) 本論文は秋楓花氏による令和 4 年度大阪教育大学初等教育教員養成課程小学校教育専攻夜間 5 年コースの卒業論文のデータの一部を元に大幅に加筆・修正したものである。

引用文献

- [1] 岩渕 功一（編著）（2021）．多様性との対話——ダイバーシティ推進が見えなくするもの—— 青弓社
- [2] Folarin, A. 田崎 亮子（翻訳・編集）（2020）混同されがちな、BLM とダイバーシティ&インクルージョン Campaign Japan 日本 Retrieved April 7, 2023, from <https://www.campaignjapan.com/article/混同されがちな-blmとダイバーシティ&インクルージョン/462068>
- [3] しんぶん赤旗（2020）．さいたま市 朝鮮学校へのマスク不支給 しんぶん赤旗 Retrieved April 7, 2023 from https://www.jcp.or.jp/akahata/aik19/2020-03-14/2020031415_02_1.html
- [4] Sue, D. W. (2010) . *Microaggressions in everyday life: Race, gender & sexual orientation*. Wiley.
（マイクロアグレッション研究会（訳）（2020）．日常に埋め込まれたマイクロアグレッション——人種ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別—— 明石書店）
- [5] Sue, D. W., & Capodilupo, C. M. (2008) . Racial, gender, and sexual orientation microaggressions: Implications for counseling and psychotherapy. In D. W. Sue, & D. Sue (Eds.) , *Counseling the culturally diverse: Theory and practice* (5th ed.) (pp.105-130) . John Wiley & Sons.
- [6] Sue, D. W., Capodilupo, C. M., Torino, G. C., Bucceri, J. M., Holder, A. M. B., Nadal, K. L., & Esquilin, M. (2007) . Racial microaggressions in everyday life: Implications for clinical practice. *American Psychologist*, 62(4), 271–286. <https://doi.org/10.1037/0003-066X.62.4.271>
- [7] Arudou, D. (2012). Yes, I can use chopsticks: The everyday ‘microaggressions’ that grind us down. *The Japan Times*. May 1st, Retrieved April 7, 2023, from <https://www.japantimes.co.jp/community/2012/05/01/issues/yes-i-can-use-chopsticks-the-everyday-microaggressions-that-grind-us-down/>
- [8] Jones, J. M. (1997) . *Prejudice and racism* (2nd ed.) McGraw-Hill.
- [9] Solórzano, D., Ceja, M., & Yosso, T. (2000) . Critical race theory, racial microaggressions, and campus racial climate: The experiences of African American college students. *Journal of Negro Education*, 69, 60–73. <http://dx.doi.org/10.17763/haer.79.4.m6867014157m7071>
- [10] Goodman, D. J. (2011) *Promoting Diversity and Social Justice: Educating People from Privileged Groups* (2nd ed.) .

Taylor & Francis.

(出口 真紀子 (監訳) 田辺 希久子 (訳) (2017) . 真のダイバーシティをめざして——特権に無自覚なマジョリティのための社会公正教育—— 上智大学出版)

- [11] Wildman, S. M. (1996) *Privilege revealed: How invisible preference undermines America*. NEW YORK UNIVERSITY PRESS.
- [12] Mekawi, Y. & Todd, N. R. (2018) . Okay to say?: Initial validation of the acceptability of racial microaggressions scale. *Cultural Diversity and Ethnic Minority Psychology*, 24 (3), 346-362. <https://doi.org/10.1037/cdp0000201>
- [13] 清水裕士 (2016) . フリーの統計分析ソフト HAD : 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- [14] 総務省 (2021) . 令和 2 年国税調査 人口等基本集計 結果の要約 総務省 Retrieved April 7, 2023 from https://www.stat.go.jp/data/kokusei/2020/kekka/pdf/summary_01.pdf
- [15] 苫野 一徳 (2022) . 学問としての教育学 日本評論社